

家庭学習応援教材

中古の日記 『紫式部日記』を読む

駒澤大学 禅学科・心理学科・商学科・法律学科2012

過程の演習 新国語問題集アシスト【古文編】

次の文章は、紫式部が一条天皇の中宮彰子に仕えていた時のことを記した日記の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。

* 左衛門の内侍といふ人はべり。あやしうすすろによからず思ひけるも、え知りはべらぬ心憂きしりうごとの、おほう聞こえはべりし。* 内裏の上の、源氏の物語、人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は、日本紀をこそ読見たるべけれ。まことに才あるべし」とのたまはせけるを、ふと推しはかりに、「いみじうなむ才がある」と、殿上人などに言ひ散らして、「日本紀の御局」とぞつけたりける。いとをかしくぞはべる。このふるさとの女の前にてだにつつみはべるものを、さる所にて、才さかし出ではべらむよ。

* この式部の丞といふ人の、童にて書読みはべりし時、聞き習ひつつ、かの人は遅く読み取り、忘るる所をも、あやしきまでぞ聴くはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう。男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」とぞ、つねに嘆かれはべりし。

それを、「男だに、オガリぬる人はいかにぞや。はなやかならずのみはべるめるよ」と、やうやう人の言ふも聞きとめてのち、「一」といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつにあさましくはべり。読みし書などいひけむ物、目にもとどめずなりてはべりしに、いよいよかかること聞きはべりしかば、いかに人も伝へ聞きて憎むらむと、恥づかしさに、御屏風の上に書きたることをだに読まぬ顔をしはべりしを、宮の、御前にて、文集のところどころ読ませたまひなどして、さるさまのこと知ろしめさまほしげにおぼしたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬもののひまひまに、一昨年の夏ごろより、楽府といふ書二巻をぞ、しどけながら教へたてきこえさせてはべる。隠しはべり、宮もしのびさせたまひしかど、殿も主上もけしきを知らせたまひて、御書どもをめたく書かせたまひてぞ、殿はたてまつらせたまふ。まことにかう読ませたまひなどすること、はた、かのものいひの内侍は、え聞かざるべし。知りたらば、いかにそしりはべらむものと、すべて世の中ことわざしげく、憂きものにはべりけり。

* 左衛門の内侍||内裏に仕える女房の名。 * しりうごと||陰口。

* 内裏の上||一条天皇。 * 日本紀||『日本書紀』をはじめとする漢文で記された歴史書。

* このふるさとの女||筆者紫式部の実家で仕えていた女性。 * この式部の丞||筆者の弟惟規。

* てづつ||不器用。 * 宮||中宮彰子。 * 文集||中唐の詩人白樂天の漢詩集『白氏文集』。

* 楽府||『白氏文集』卷三、四に収載されている漢詩。

* しどけながら||とりとめなくではあるが。 * 殿も主上も||藤原道長も一条天皇も。

* ことわざしげく||煩雑なことが多く。

問 次のア～オの中から、本文の内容に合致しているものを一つ選べ。

- ア 紫式部は、実家では包み隠していた漢籍の教養を、宮中でも自慢することはなかった。
- イ 紫式部は、子供の時からいつも弟の惟規と競って学問をし、父親の期待にこたえていた。
- ウ 紫式部は、宮中では屏風の上に書いてある漢詩文をさえ読めず、恥ずかしい思いをした。
- エ 藤原道長は、中宮と紫式部の二人が隠していた漢詩集を見つけて、一条天皇に献上した。
- オ 紫式部は、宮中において悪口を言われたので、どのように言い返そうかと考えていた。

【解説】

◇本文の構成

第一段落

左衛門の内侍が、「学識をひけらかしている」と紫式部を非難。

⇔

実家に居る時から、人前で学識を見せることはしていない。

第二段落

式部の丞が学問していた時に、隣で聞き習う。

=

紫式部の聡明さは「男であれば」と親が嘆くほどであった。

第三段落

学識を人に見せずにいたが、中宮が漢詩文を学びたいと願ったため、人に隠れて教える。

←

左衛門の内侍が知ったら非難するだろうと思うと、煩わしいことだ

【現代語訳】

左衛門の内侍という人がいます。(この人が私を)不思議とむやみに快からず思っていたのも、知ることができませんでいやな陰口が、たくさん聞こえてきました。一条天皇が、源氏物語を、人に読ませなさっては聞きになっていたときに、「この人(紫式部)は、(あの難しい)日本紀を読んでいるようだ。本当に学識があるらしい」とおっしゃったのを、(左衛門の内侍が)ふとあて推量に、「紫式部は)たいそう学識をひけらかしている」と、殿上人などに言いふらして、「(私に)『日本紀の御局』と(あだ名を)つけてしまった。たいそうおかしなことでございます。(私は)実家の侍女たちの前でさえ(漢籍を読むことを)はばかっておりますのに、そのような所(宮中)で、(どうして)学識をひけらかしたりするでしょうか(いや、いたしません)。

式部の丞という人(紫式部の弟)が、まだ子どもころに漢籍を読んできましたとき、(私はそばで)聞き習っていて、あの人(式部の丞)は読み覚えるのに手間取ったり、忘れ(たりす)るところでも、(私は)不思議なほど聡明でいましたので、学問に気を入れていた親は、「残念(なこと)だ。

(この娘が)男の子でなかったことは、不幸なことよ」と、いつも嘆いていらっしやいました。

それなのに、「男でさえ、学問をひけらかしてしまう人はどうであろうか。栄達しないままでいるようですよ」と、しだいに人が言うのを聞きとめてからは、「二」という(簡単な)漢字でさえ書ききることもしませんし、たいそう不器用で、あきれてしまいます。(かつて)読んだ漢籍などといったようなものは、目にもとめなくなっておりまして、ますます、このようなことを聞きましたので、どんなにか人も伝え聞いて(私を)不快に思っているだろうと、恥ずかしくて、御屏風の上に書いてある文字でさえ読めないふりをしておりまして、中宮様が、御前で、白氏文集のところどころを(私に)読ませなさるなどして、そのような(漢詩文に関する)ことをお知りになりました(私に)思っておいでしたので、たいそう人目を避けて、誰もお仕えしていない合間合間に、一昨年の夏ごろから、楽府という本二巻を、とりとめなくではあるが教え申し上げております。(このことも)隠しておりまして、中宮様もお隠しになっておりましたが、殿(藤原道長)も主上(一条天皇)も(その)様子

をお知りになって、漢籍などを立派に（書家に）書かせなさって、殿は（それを中宮様に）差し上げなさいました。本当にこうして（中宮様が私に漢籍を）お読ませになったりしていることは、おそらく、あの口うるさい（左衛門の）内侍は、聞きつけることができないでしょう。もし知ったならば、どんなにか悪口を言うことでしょうか（思うと）、何事につけても世の中は煩雑なことが多く、つらいものでございませぬ。

【解答】

ア

ア 第一段落に「このふるさとの女の前にてだにつつみはべる」とあり、紫式部が実家で漢籍の教養を隠していたことがわかる。また、その直後に「さる所（＝宮中）にて、才さかし出ではべらむよ（＝学識をひけらかさうか、いや、ひけらかしはしない）」とあり、宮中でも漢籍の教養を隠そうとしていたことがわかる。さらに、第三段落より「中宮に楽府を教えた」のも「人がお仕えしていない合間合間」であることに注意する。

イ 第二段落に「弟は読み書きを覚えるのに手間取ったり、忘れ（たりす）るところでも、（私は）不思議なほど聡明でいましたので」とあるが、「弟…と競って学問をし」という記述はない。

ウ に関する記述は第三段落にあるが、これは漢詩文の知識をひけらかしていることと噂されることが恥ずかしくて、「読めないふり」をしていたということ。本当に読めなかったわけではない。

エ 第三段落「隠しはべり、宮もしのびさせたまひ」ていたのは、紫式部の漢籍の教養のことであり、漢詩集のことではない。

オ本文中に「紫式部が言い返そうとした」という記述はない。第三段落「いかにそしりはべらむもの」は、「中宮が紫式部に漢詩文を読ませていると知ったら、（左衛門の内侍が紫式部に対して）どんなにか悪口を言うだろう」という意味。

【作品（作者）解説】

一〇一〇年ごろの成立。『源氏物語』の作者である紫式部が一条天皇の中宮彰子に仕えていた頃の日記。全体の約三分の二を寛弘五年（一〇〇八）の記事が占めており、中宮彰子の皇子誕生前後の人々の動きが生き生きと描かれている。日記後半には、和泉式部や清少納言などの人物評も記され、当時の知識階級の女性の内面をうかがい知ることができる。